

第4回

日本語の教え方

伊呂波

初級の教え方

日本語国際センター専任講師 阿部洋子

海外で活躍している日本語教師のみなさんから、よく「日本語教授法を知りたい」「すぐに使える授業活動を提供してもらいたい」という要望をいただきます。

「日本語の教え方 イロハ」のコーナーでは、日本語国際センターの専任講師が、日本語の教え方を学んだことのない方に、「コースデザイン」や「読解」「会話」「聴解」「評価」などの基本的な教授理論、教授知識をわかりやすく解説します。既に日本語を教えている方も日本語教授法に関する基礎固め、知識の再点検にお役立てください。

はじめに

みなさんの学習者はどのような目的で日本語を学習していますか。目的によって、「何を」教えるかを考える必要があります。みなさんは目的に合わせて「何を」教えるかを考えていますか。また、実際に教えるときには、「どのように」教えるかも考える必要があります。「どのように」教えるかは、学習の目的によっても変わりますし、学習者の年齢や学習スタイルなどによっても変わります。

本稿は、日本語でコミュニケーションができるようになることを目的にした初級のコースを想定しています。そして、学習者がどのように外国語を学んでいくかという言語学習のプロセスをふまえた教え方の工夫を紹介していきます。

コミュニケーションに必要な条件や能力については、前回のこのコーナー「会話」で紹介されたことをもとにしていますから、参照してください。

言語学習のプロセスと授業の流れ

人がある言語形式（文型など）を学習し、実際に使えるようになる（習得する）ためには、簡単に示すことのようなことを順番にしていると考えられます。

- ① 新しい言葉に気づき、どのような意味を表すのかわかる。
- ② その言葉の意味、文法規則、使い方などを覚える。
- ③ 覚えたことを使って実際の場面で目的を達成する。

この言語学習のプロセスをふまえて、授業の流れを考えると、図1のようになります。上の段に学習者が

何をしているかを示しました。

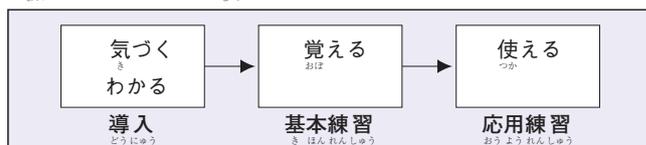


図1 言語学習のプロセスをふまえた授業の流れ

教室では、①教師が新しい語彙や文型を導入し、学習者がそれを理解します。そして、②学習者が覚えるための練習をします。覚えることができたなら、③実際の場面で使えるようになるための練習をします。この三つの段階を導入・基本練習・応用練習と呼ぶことにします。それぞれの段階について、教師と学習者の役割を確認しながら、少しくわしく見ていきましょう。

導入で行う活動

- 教師の役割： 学習者に新しい学習項目を提示する。形（言語形式）と意味を理解させる。
- 学習者の役割： 新しい学習項目に気づく。形と意味がわかる。

初級の学習者は、コミュニケーションに使えることば（言語の知識）が少ないので、さまざまな場面でコミュニケーションができるようになるために、多くの語彙や文型の意味と使い方を知る必要があります。新しく学習しなければならぬ項目が多いため、母語や媒介語を使って説明する方法だけでなく、学習者に意味を推測させ気づかせる方法を取り入れるようにしましょう。自分で気づいたことは記憶に残りやすいですし、理解するためにあれこれと考えることが学習の方法を自分で作っていく

ことにつながるからです。

では新しい文型を導入する方法を比べながら、学習者に意味を推測させ気づかせる導入がどのようなものかを確認してみましょう。

- a. 黒板に文型を書いて、意味や使い方を母語で説明する。
- b. 文型が使われている会話文を提示して、説明する。
- c. 絵や写真、ビデオなど場面や状況と合わせて提示する。
- d. 動作や実物などを使って提示する。

aはどんな文型の導入にも使えますが、学習者に意味を推測させ気づかせることはできません。bの会話文を提示する方法は、新しい文型が何であるかを気づかせることができます。cやdは、文型によって使える場合とそうでない場合がありますが、文の意味を視覚的なイメージから推測させることができます。導入時に学習者に意味を推測させようと思ったら、学習者が気づくまで待つことも大切です。学習者が考える時間を作るようにしてください。そして、理解できたかどうかを確かめることも教師の重要な役割です。

**基本練習で行う活動**

- 教師の役割： 学習者が新しい学習項目を覚えるように練習させる。
- 学習者の役割： 新しい学習項目を覚える。すらすら言える・書けるようになる。

初級の早い段階では、新しい学習項目が理解できても、発音にも慣れていませんし、文字を読んだり書いたりするのも時間がかかることが多いです。そのために何度も繰り返したり書いたりする練習が必要になります。その方法の一つとして、教師の指示に従って単語や文を次々と声に出して言う「パターンプラクティス」という練習方法があります。単語や文をそのまま繰り返す反復練習や、文の一部を他の単語に替える代入練習、質問に応える応答練習などがあります。

パターンプラクティスは、正しい形を覚えるための機械的な練習で、文の意味を考えなくてもできます。日本語でコミュニケーションができるようになるためには、パターンプラクティスだけでは不十分です。自分が伝えたいことを表現してみる練習が必要です。基本練習の段階でも、ある程度すらすら言えるようになったら、学習者に伝えたいことを考えさせる練習を取り入れるようにしましょう。次の例は「Vたらどうですか」の練習ですが、学習者は自分で考えた助言を言っています。

**<練習例>**

教師： 頭が痛いです。

- 学習者A： 薬を飲んだらどうですか。
- 学習者B： 少し休んだらどうですか。
- 学習者C： うちに帰ったらどうですか。

この練習では、学習者が「選択権」(第3回「会話」参照)を使っています。このように基本練習の段階でも日常的な場面を使って、コミュニケーションに必要な条件を取り入れた練習をすることができます。

学習者が意味を考えてする練習は、「みんなの教材サイト」や「授業のヒント」、市販の教室活動集などから探すことができます。みなさんの学習者に合わせて探してみるとよいでしょう。

**応用練習で行う活動**

教師の役割： 教室にコミュニケーションの場を設定する。

学習者の役割： 日本語でコミュニケーションをする。

応用練習の段階では、学習者にとって身近で、将来出会う可能性のある実際のコミュニケーション場面を想定して、具体的な状況や場面で習った語彙や文型を使う練習を行います。

会話の場合、場面や状況によって話す内容や表現を決めたり、適当な表現を使って会話を始めたり終わらせたり、相手の反応によって話すことを変えたりする練習が必要です。第3回の「会話」のコーナーで紹介された具体的な指導法が参考になります。

応用練習に読解を取り入れることもあるでしょう。その場合は、第2回「読解」のコーナーで紹介されたことを参考にしてください。

**おわりに**

最後に、もう一つ重要な教師の役割を紹介します。みなさんは、練習の段階で学習者が適切に言えたり「いいですね」と言ったり、まちがえたときには直させたりしていることと思います。それをフィードバックと言います。初級の学習者は自分のアウトプット(=言ったり書いたりしたこと)に自信がありませんから、教師の適切なフィードバックがとても重要です。学習者に何ができて何ができていないかを知らせるものだからです。学習者の反応をよく見て、適切なフィードバックも忘れないでください。

**参考文献**

国際交流基金(2007)『国際交流基金日本語教授法シリーズ9 初級を教える』ひつじ書房  
小柳かおる(2004)『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク  
三牧陽子(1996)『日本語教育トレーニングマニュアル⑥日本語教授法を理解する本 実践編』パベル・プレス